

大会参加記

熱気を感じた福島大会

札幌市文化資料室 竹内啓・中村沙織

初日の太田報告(研修会D)は、未だ公文書館機能が十分備わっていない自治体に、その熟度に応じて評価選別業務の処方箋を提供しようとする実用的な試案です。全国でまだ50余りの自治体しか公文書館を整備していない実情からも、こうした試案は極めて有用であると考えます。一方、私などは沖縄県のシリーズ選別に代表される全国の独創的な評価選別手法が綺羅星のごとく紹介されるかもと秘かに期待していたため、報告後そんなに沢山あるはずもないかと一人合点したものでした。2日目の梅原報告(全体会I)では、国立公文書館の公式見解にあらずと氏自身が前置された地方公文書館の活性化私案に注目しました。その前提にはもちろん国の専門官としての氏の緻密なデータ分析がある訳ですが、私たちはこれらをよく咀嚼し、地方の実情に即した形でより膨らませていかなければなりません。続く煙山報告は、地方の文書管理の実情とその限界について検証した詳細な調査報告でした。氏の報告内容は明快で、このままでは地方の末端がますます取り残されていくという危機感が伝わってきました。都道府県のリーダーシップにより地方の底上げを図るにしても、今組織体的にそれが可能なところはそう多くはないように思えます。微かな光明は新法施行を背景とする自治体自身の覚醒に求められます。初日の懇親会のあと、23時頃まで続いた2次会での熱気はその可能性が夢想とばかりも言えないことを物語っているように私には感じられました。時の経つのを忘れた2次会でした。(文責：竹内)

初日はまず、研修会B「学校教育との連携による普及活動」を受講しました。当室でも現在小中学生・高校生を対象とする講座を開催していますが、学校との連携までには及んでいません。栃木・福井両文書館の多岐にわたる取り組みと成功例を大変興味深く拝聴しましたが、やはり専門的な知識を有する複数名の職員を擁していなければ、こうしたきめ細かい対応は困難であると痛感しました。

2日目の第1分科会では全国の地方自治体の実態を、全体会2の報告Ⅲでは自治体史編纂と行政文書に係る調査報告を拝聴しました。地方自治体の抱える共通課題として、人員削減と専門職員不在により評価選別・レファレンス対応が不十分なこと、さらに文書を作成する職員一人一人の意識改革が不可欠であるということに改めて強く感じました。現在、公文書館開設に取り組んでいる本市でさえも、文書管理の重要性について全職員からコンセンサスを得ることは至難の業と言えます。ましてやそうした気運を持たない市町村においては、より困難で後回しにされがちな課題に違いありません。報告を拝聴して、今後国やその他の先進公文書館、さらには全史料協事務局に対し、こうした諸課題へのフォローを求める声がますます高まることだろうと感じました。

最後に、閉会式では開催地の福島県立文書館長から次回の京都府立総合資料館長へ、引継として直江兼統の兜を模したペーパークラフト「愛」の紙兜が受け渡されたのが印象に残っています。次回大会への期待がいっそう膨らみました。

(文責：中村)